

「ていねいさ」からみた文章・談話の構造

野田尚史

キーワード：ていねい体と普通体の混用、ていねい形、中立形、文の種類、文体

要 旨

ていねい体の文と普通体の文が混ざって使われている文章・談話を材料に、「ていねいさ」の観点から文章・談話の構造を分析し、次のような結論を導きだす。

1) 文章・談話を構成する文には、5つの種類がある。話し手の心情を表す「心情文」、従属節のようにほかの文に従属している「従属文」、単に事実を述べるだけの「事実文」、判断や説明を表す「主張文」、質問や命令を表す「伝達文」である。

2) ていねい体の文が基調の文章・談話は、聞き手を意識する主張文や伝達文を中心に構成されている。その中に聞き手を意識しない心情文や従属文があると、その文は、聞き手をていねいに待遇するかどうかを考慮しない普通体の文になる。

3) 普通体の文が基調の文章・談話は、聞き手を意識しない事実文を中心に構成されている。その中に聞き手を意識する主張文や伝達文があると、その文は、ていねい体の文になることがある。

1. はじめに

一つの文章・談話は、すべての文がていねい体か普通体のどちらかで統一されていることが多い。しかし、ていねい体と普通体が混ざって使われている文章・談話もある。たとえば、次の(1)は、「です」、「ます」を使ったていねい体の文が基調になっている文章の一部であるが、点線を引いた文のように「です」、「ます」を使わない普通体の文が混じっている。

(1) 内陸のほうではヤムが、海岸のほうでは魚がとれる。そこで内陸と海岸が交易し合うのです。(山口昌男『文化人類学への招待』p.48)

この論文では、このような、ていねい体と普通体の混用は、文章・談話の構造を反映したものだ考える。つまり、混用がおきるのは、一つの文章・談話が、同じ性質をもった文が集まってできているのではなく、たがいに性質の違ういくつかの種類文が集まってできているからだ考える。たとえば、前の(1)の「内陸のほうではヤムが、海岸のほうでは魚がとれる。」は、その後の「そこで内陸と海岸が交易し合うのです。」の「そこで」に続いていく文であり、理由を表す従属節のようにその後の文に従属する文になっている。そのため、この文はていねい体にならず、普通体になっているとみるのである。

(2) 「ていねいさ」からみた文章・談話の構造

この論文では、ていねい体と普通体が混用された文章・談話を材料にして、次のような順序で、文章・談話の構造をあきらかにしていく。

- 1) ていねい体と普通体の混用についてのこれまでの研究を概観する
- 2) ていねい体・普通体を、形態と機能と文体にわけて、定義しなおす
- 3) ていねい体と普通体の混用がおきる条件を、実例をもとに、あきらかにする
- 4) ていねい体と普通体の混用を文章・談話の構造という点から説明する
- 5) ていねい体と普通体の混用の程度によって、文体を分類する
- 6) 文章・談話の構造から説明できる文法現象がほかにもあることを述べる

2. これまでの研究

ていねい体と普通体の混用を扱ったこれまでの研究は、大きく次のア)とイ)の2つのタイプに分けられる。

ア) 日本語の伝統的な文法研究の延長にあるもので、混用を例外的な現象とするもの

イ) 英語などの談話研究の延長にあるもので、敬語のレベル・シフトととらえるもの

ア) のタイプの研究は1960年代より前に行われたものが中心で、代表的なものとしては三尾(1942: 一〇、一一)と芳賀(1962: 13)があげられる。これらの研究では、ていねい体と普通体は混用しないのが原則だという前提にたつたうえで、どんな場合に混用されるのかを列挙している。たとえば、三尾(1942)では、ていねい体の文章・談話の中に普通体が現れるのは、「(1)獨りごとの部分」と「(2)生きた時間から切りはなして、動作状態そのものを掲げるとき」だとし、反対に普通体の文章・談話の中にていねい体が現れるのは、「(1)命令」、「(2)陳謝、感謝」、「(3)皮肉、からかひ」、「(4)遊戯」の場合だとしている。そのほか、メイナード(1991)とMaynard(1991)は、混用を例外的な現象だとはしていないが、結果的にア)のタイプの研究に近いものになっている。

一方、イ)のタイプの研究は1980年代より後に行われるようになってきたもので、生田(1983)、生田・井出(1983)、三牧(1993)、宇佐美(1995)、足立(1995)などがあげられる。これらの研究では、ていねい体と普通体の混用を敬語のレベル・シフトの一つとしてとらえたうえで、レベル・シフトを、話し手の聞き手にたいする心的距離の変化や、話題が移行するときの標識といった点から説明している。

この論文で主張しようとするのがア)のタイプの研究と違う点は、混用を文章・談話の構造という点から説明しようとする点である。イ)のタイプの研究との違いは、ていねい体を尊敬語や謙譲語とはっきり区別することと、文章・談話を構成している一つ一つの文の文法的な性質の違いをとらえようとする点である。

3. 「ていねいさ」の形態と機能と文体

ていねい体と普通体の混用をみるまえに、「ていねいさ」という文法カテゴリーがどのような形態で表され、どのような機能を持ち、また、どのような文体をつくるかという点について整理し、用語の定義をしておきたい。

はじめに、「ていねいさ」を表す形態は、次の(2)のように、「デスマス形」と「非デスマス形」の2つが対立していると考える。

(2) 「ていねいさ」の形態

┌ デスマス形…… 「します」、「寒いです」、「湖です」などの形
└ 非デスマス形…… 「する」、「寒い」、「湖だ」などの形

デスマス形は、「です」や「ます」という、ていねいさを表す標識をもつ「有標」の形であり、非デスマス形は、そのような標識をもたない「無標」の形である。なお、「湖でございます」のような形は、「ある」以外の動詞にはないなど不完全な形なので、ゴザイマス形などとして独立させないで、デスマス形の一つとする。

次に、「ていねいさ」を表す形態がもつ機能は、次の(3)のような対立になっていると考える。

(3) 「ていねいさ」の機能

┌ ていねいさ考慮 ┌ ていねい…… ていねいに待遇する
└ 非ていねい…… ていねいに待遇しない
└ ていねいさ非考慮…… ていねいに待遇するかどうか考慮しない

「ていねいさ」を表す形態の機能は、ていねいさを考慮する場合と考慮しない場合にわかれる。特定の聞き手がいて、ていねいさを考慮する場合は、さらに「ていねい」と「非ていねい」にわかれる。たとえば、次の(4)の「電話します」は聞き手をていねいに待遇するという「ていねい」の機能を持ち、「わかった」、「待ってる」は聞き手をていねいに待遇しないという「非ていねい」の機能をもっている。

(4) 「ええ。だから、暇になったら電話します」

「ああ。わかった。待ってるよ」 (北川悦吏子『ロング バケーション』p.135)

一方、ていねいさを考慮しない「ていねいさ非考慮」の機能をもつのは、次の(5)の「会う」や、その次の(6)の「キーワードである」のようなものである。

(5) 前は、私、初めて会う人とはぜんぜんお話ができなかったんですね。

(『JUNON』1997.3 p.128)

(6) 「複雑系」は、いまもつとも注目を集めている、最先端科学のキーワードである。

(吉永良正「『複雑系』とは何か」p.3)

(5)の「初めて会う人」の「会う」は、「会う」を使うか「会います」を使うか、選択の余地がないものである。つまり、この「会う」は「会います」と対立していないのである。このようなものは、「ていねいさ非考慮」だと考える。また、(6)の「キーワードである」は、読み手をていねいに待遇するかどうかを考えない書きことばに使われたものである。このようなものも、「ていねいさ非考慮」だと考える。「キーワードである」の「である」という形は、「ていねいさ非考慮」のときにだけ使われる。「だ」が「非ていねい」のときにも「ていねいさ非考慮」のときにも使えるのと対照的である。

ここまでみてきた「ていねいさ」の形態と機能は、次の(7)のような対応関係をもっている。

(4) 「ていねいさ」からみた文章・談話の構造

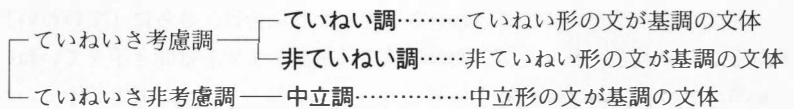
(7) 「ていねいさ」の形態と機能の対応

形態	機能		呼称
デスマス形	ていねいさ考慮	ていねい	ていねい形
非デスマス形		非ていねい	非ていねい形
		ていねいさ非考慮	

前の(4)の「電話します」のように、「デスマス形」という形態は「ていねい」という機能と対応している。このようなものを、簡単に「ていねい形」とよぶことにする。一方、「非デスマス形」は、「非ていねい」に対応している場合と、「ていねいさ非考慮」に対応している場合がある。前の(4)の「わかった」、「待ってる」のように、「非ていねいの機能をもつ非デスマス形」のことを、簡単に「非ていねい形」とよぶことにする。前の(5)の「会う」や(6)の「キーワードである」のように、「ていねいさ非考慮の機能をもつ非デスマス形」のことを、簡単に「中立形」とよぶことにする。

最後に、「ていねいさ」から文章・談話の文体を分類する。三上(1963: pp. 23-24)にしたがって、文体には「～調」という用語を使い、次の(8)のように、「ていねい調」、「非ていねい調」、「中立調」の3つにわけると。

(8) 「ていねいさ」からみた文体



「ていねい調」と「非ていねい調」は、基本的に、特定の聞き手がいる話しことばに使われ、「中立調」は、基本的に、特定の聞き手がない書きことばに使われる。

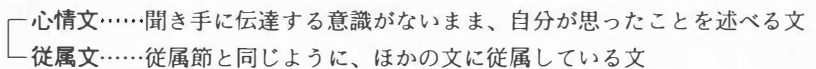
この論文でとりあげるのは、ていねい形と中立形が混用された文章・談話である。次の4.では、ていねい調の中に現れる中立形の文をとりあげ、その次の5.では、中立調の中に現れるていねい形の文をとりあげる。

なお、「ていねいさ」の混用には、ていねい形と非ていねい形の混用や、非ていねい形と中立形の混用もある。同じ聞き手にたいして、ていねい形と非ていねい形を混ぜて使う「ていねい形と非ていねい形の混用」については、岡本(1997)などで扱われている。一つの文章・談話の中で、非ていねい形と中立形を混ぜて使う「非ていねい形と中立形の混用」は、どちらの形も表面的には同じ非デスマス形になるので、この論文では扱わない。

4. ていねい調の中の中立形の文

「です」、「ます」を使ったていねい形の文が基調の「ていねい調の文章・談話」の中に、「です」、「ます」を使わない「中立形の文」が混じることがある。ていねい調の文章・談話の中に混じる中立形の文というのは、次の(9)のような、心情文と従属文である。

(9) ていねい調の中で中立形になる文



心情文というのは、たとえば、次の(10)の点線を引いた部分のようなものである。

- (10) 私の誕生日に、娘がおいしいケーキを買ってきてくれ、感謝していただきました。一カ月して夫の誕生日には、子どもたちが二万円もするネクタイをプレゼントしました。主人はとても感激して喜んでいますが、この違いは何なのだ。

(『朝日新聞』1991.10.27 日曜版 p.7「いわせてもらお」)

この(10)の点線の部分は、自分の心情が口をつけて出てきた心情文である。心情文は、聞き手に伝達するという意識がないため、中立形の文になる。仁田(1991)は、聞き手がいない「独白」や「心内発話」でいいねい体が現れないことを指摘しているが、心情文がいいねい形にならず中立形になるのも、聞き手が意識されていないからである。

次の(11)の点線の文も心情文で、中立形になっている。

- (11) つんく 音には出てるんですよ。で、聴く側が「あれ? なんでコイツらはこうなのかな?」って思えるところまで僕らもいかなきゃいけないし。例えば、FMでも、みんな同じように流れちゃうじゃないですか。べつに誰がいいとか悪いとかじゃなくて、同じ番組の中でシャ乱●も流れれば、スピッツも、SMAPも、スーパーモンキーズも、郷ひろみさんも流れて……。その中から特別なものを聴き取る耳を持つのは、すごく難しいと思うんですよ。僕らもバンドやって、プロになって、給料もらうようになって、それから気づきはじめましたから。すごい失礼な話なんですけどね。でも、そこまでいかなきゃダメだな、と。周りがね。そうなるように僕らは頑張るしかない。

(小室哲哉(編)『With t 小室哲哉音楽対論 Vol. 4』pp.90-91)

一方、従属文というのは、たとえば、次の(12)の点線を引いた文のようなものである。

- (12) 授業を教えている時の先生は、恐いくらいに真剣で、教育熱心な姿勢を漂わせているのですが、休み時間になると、男の子たちと友だち同士のように遊んでいるのでした。若くて、格好が良くて、少し厳しいけれども、いつも子供たちのことを考えていて、その上、たびたび口にする冗談もおもしろい。こんな先生が女子にもてない訳がありません。(山田詠美『風葬の教室』pp.28-29)

この(12)の点線の文は中立形になっているが、この文はその後の文の「こんな」の内容を表しているもので、後の文に従属している従属文である。それは、この文を次の(13)のように「先生」を修飾する節にしても、ほとんど意味がかわらないことからわかる。

- (13) 若くて、格好が良くて、少し厳しいけれども、いつも子供たちのことを考えていて、その上、たびたび口にする冗談もおもしろい先生が女子にもてない訳がありません。

次の(14)の点線の文も、従属文である。この文は、その後の文の「こりゃ」の内容を表している従属文で、中立形になっている。

- (14) つか 僕は小説でも芝居でも他人と共有できるやさしい言葉で新しい感覚を出すのが本当と思っておりますので、できるだけわかりやすく書こうとしてるわけ

(6) 「ていねいさ」からみた文章・談話の構造

です。昔なんか朝日新聞から頼まれると肩に力の入った難しい漢字をいっぱいつかいましてね、悦えつに入ってたんですが、あとで自分で読んでわからない。女性誌なんか頼まれるとスラスラ書けちゃう。こりゃいかんと思って、やさしく書くことにしたんですが、よく読者や同業者から「ああ軽く書いてうらやましい」と言われ、泣きたくなることがあります。僕は全身の力を込めてすっぽぬかしているのに。(井上ひさし・つかこうへい『国ゆたかにして義を忘れ』pp. 75-76)

このような従属文は、メイナード(1991: p. 77)やMaynard(1991: p. 563)でも触れられているように、ていねい調の文章・談話の中にあっても、ていねい形にならず、中立形になることが多い。それは、連体修飾節などの節の中では基本的にていねい形が使われないという、三尾(1942: 一五～一九)で考察されている現象と同じことだと考えられる。

ただし、従属文でも、従属度の低い場合には、ていねい形が現れる。従属節でも「～が」や「～けれど」のように従属度の低い従属節ではていねい形が現れるが、それと同じように、従属度の低い従属文にはていねい形が現れるのである。たとえば、次の(15)の点線の文は、その後の文に従属していると考えられるが、「～が」や「～けれど」に相当する従属度の低い従属文である。この点線の文は、「です」、「ます」が使われない中立形の文になっているが、「です」、「ます」を使ったていねい形の文にしても不自然にはならない。

- (15) 「記号士たちが何かをたくらんでいるらしいことはうすうすわかっていたんです。奴らは動きはじめていますよ。しかし具体的な狙いがどこにあるのかはまだわからない。そしてそれがどこであなたに結びついたのかもわからない。頭骨の意味もわからない。しかしヒントの数が増えれば、増えるぶんだけ我々は事態の核心に近づいていきます。これだけは間違いありません」

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』p. 226)

このように、従属文でも従属度の低いものは中立形にならないことも多いが、従属度の高い従属文は中立形になりやすい。

5. 中立調の中のていねい形の文

「です」、「ます」を使わない中立形の文が基調の「中立調の文章・談話」の中に、「です」、「ます」を使った「ていねい形の文」が混じることがある。中立調の文章・談話の中に混じるていねい形の文というのは、次の(16)のような、伝達文と主張文である。これらは、単に事実を述べるだけの文ではなく、聞き手への働きかけがある文である。

- (16) 中立調の中でていねい形になる文

- ┌ 伝達文……聞き手にたいする質問や命令を、話し手が聞き手に伝達する文
- └ 主張文……事態にたいする判断や説明を、話し手が聞き手に主張する文

伝達文というのは、芳賀(1954)の用語であるが、たとえば、次の(17)や(18)の下線を引いた文のようなものである。

- (17) もしかすると、ほかにもっともっと素敵な音楽があるかもしれないのに、旅をつづけず、わらじをぬいでしまえば、みられるはずの景観もみられないままであ

る。それが、もったいない、とは思いませんか？

(黒田恭一『はじめてのクラシック』p.159)

- (18) 「夜のヒットスタジオデラックス」(毎週水曜、フジ)の、海外アーティストの場面だけを毎週見ているが、司会者と通訳の音楽の知らなさに驚いている。海外の一流のアーティストに対し、彼らの音楽性やキャリアには触れず、ファッションや知っている日本語は、などと陳腐な質問ばかり。通訳も誤訳や変な表現をする。冷や汗をかかずに見られる番組になることを切望します。

(『朝日新聞』1987.12.2 朝刊 p.32「はがき通信」)

(17)の下線の文は読み手に対する質問を表している。(18)の下線の文はテレビ番組に対する要望を表している。このように、話し手から聞き手などにたいして働きかけがある文は、中立調の文章・談話の中にあっても、ていねい形の文になることが多い。

次に、主張文というのは、たとえば、次の(19)や(20)の下線を引いた文のようなものである。

- (19) 「きょうの料理」(月一土、NHK) を見ているが、聞き役のアナウンサーの髪形が不快です。「クッキング入門」(16日)でも、料理の第一歩として、髪がじゃまにならぬよう束ねる、そで口をすっきりさせる、といていた。長い前髪が顔にかけ、それをふり払う様子が映ったりすると、料理の手元よりそちらが気になって仕方がない。
(『朝日新聞』1987.11.30 朝刊 p.28「はがき通信」)
- (20) 仕方なく私は何もかもをていねいにやるよう心がけた。ボールをきちんとふき、調味料のふたをそのつどしめ、落ちついて手順を考え、イライラして気が狂いそうな時は手を休めて深く呼吸をした。はじめはあせりで絶望したけれど、ふいにすべてが直りはじめた時は、まるで自分の性格まで直っちゃったみたいよ！ と思った。うそでしたけどね。

今、私が働いている料理の先生のアシスタントになれたことは、実は大変なことらしかった。
(吉本ばなな『キッチン』p.92「満月——キッチン2」)

(19)の下線の文は、単に事実を述べている文ではなく、この文章の書き手が読み手やこのテレビ番組のアナウンサーにいちばん主張したいことを述べている文である。(20)の下線の文は、おこったできごとを述べていく物語の筋から離れて、作者が説明を加えている文である。このように、話し手が聞き手などにたいして主張したり説明したりする文は、中立調の文章・談話の中にあっても、ていねい形の文になることがある。

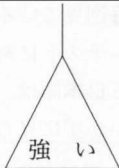

6. 「ていねいさ」の混用からみた文章・談話の構造

一つの文章・談話は、ふつう、同じ性質をもった文が対等の資格で集まってできているのではなく、いくつかの種類が混じってできている。たとえば、次の(21)の文章を構成しているのは、それぞれ違う種類の文だと考えられる。

- (21) 自分が勝ったときのことを想像する。すると、勝つことが多くなる。実力以上の力が出るからだそうだ。あなたも試してみませんか。でも、むずかしいかなあ。

(8) 「ていねいさ」からみた文章・談話の構造

ここでは、文章・談話を構成する文を、次の(22)のように、5種類にわけける。

(22) 文章・談話を構成する文の種類	聞き手への働きかけ	ほかの文への従属
心情文 (「でも、むずかしいかなあ。」)		
従属文 (「自分が勝ったときのことを想像する。」)		
事実文 (「すると、勝つことが多くなる。」)		
主張文 (「実力以上の力が出るからだろう。」)		
伝達文 (「あなたも試してみませんか。」)		

心情文は話し手の心情を表す文、従属文はほかの文に従属している文で、これらはいねい調の文章・談話の中で中立形になる文としてあげたものである。事実文は、単に事実だけを客観的に述べる文である。主張文は判断や説明を表す文、伝達文は質問や命令を表す文で、これらは中立調の文章・談話の中でいねい形になる文としてあげたものである。

文の「ていねいさ」からみると、この表(22)で上のほうにある文は中立形になりやすい。心情文が中立形になりやすいのは、表の真ん中の欄に示したように、聞き手への働きかけがないためである。従属文、そのなかでも従属度の高い従属文が中立形になりやすいのは、表のいちばん右の欄に示したように、従属節のようにほかの文に従属する性質が強いためである。反対に、表の下の方にある文は、聞き手への働きかけが強いため、いねい形になりやすい。伝達文がいちばんいねい形になりやすく、主張文がその次にいねい形になりやすい。

それでは、文章・談話を構成しているのはこのような5種類の文だということを前提に、いねい調の文章・談話と、中立調の文章・談話の構造を考えていこう。

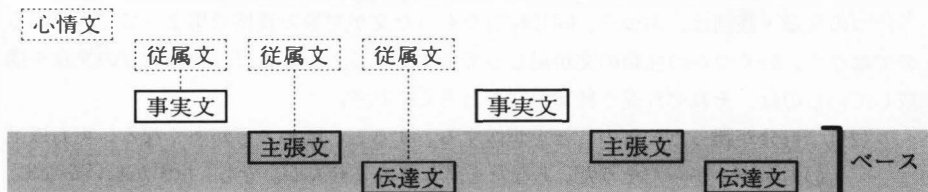
はじめに、いねい調の文章・談話は、次の(23)のような構造をもっていると考える。

(23) ていねい調の文章・談話の構造

- ┌ ていねい形の主張文や伝達文をベースに構成されている
- └ そこに、中立形の心情文や従属文が混じることがある

これを図示すると、次の(24)のようになる。いねい調の文章・談話は、聞き手を意識し、聞き手に主張したり伝達したりする主張文や伝達文がベースになっている。そのようなベースの主張文や伝達文はいねい形になり、それに加え、事実文もいねい形になる。そのため、太い実線で囲んだように、いねい形の文が基調になる。そこに、聞き手に伝達しようという意識がない心情文や、主張文や伝達文に従属している従属文が入ってくると、そのような文だけは、細い点線で囲んだように、中立形の文になる。

(24) ていねい調の文章・談話の構造 (実線がていねい形、点線が中立形)



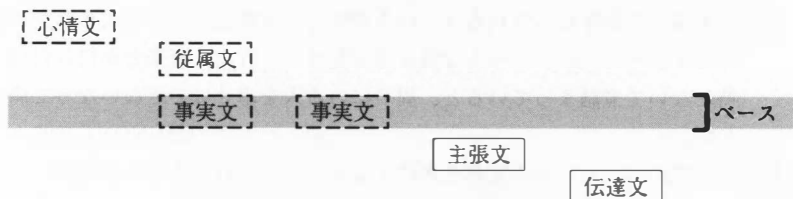
次に、中立調の文章・談話は、次の(25)のような構造をもっていると考える。

(25) 中立調の文章・談話の構造

- ┌ 中立形の実事文をベースに構成されている
- └ そこに、ていねい形の主張文や伝達文が混じることがある

これを図示すると、次の(26)のようになる。中立調の文章・談話は、聞き手を意識せず、事実を客観的に述べるだけの事実文がベースになっている。そのようなベースの実事文は中立形になり、それに加え、心情文や従属文も中立形になる。そのため、太い点線で囲んだように、中立形の文が基調になる。そこに、聞き手を意識し、聞き手に主張したり伝達したりする主張文や伝達文が入ってくると、そのような文だけは、細い実線で囲んだように、ていねい形の文になることがある。

(26) 中立調の文章・談話の構造 (点線が中立形、実線がていねい形)



7. 「ていねいさ」からみた文体

ここまで、簡単に、「ていねい調」、「中立調」という用語を使ってきたが、ていねい調、中立調といっても、それぞれに種類がある。ていねい調では、すべての文がていねい形になっているものから、かなり中立形が混じるものまでである。中立調では、すべて中立形になっているものから、かなりていねい形が混じるものまでである。

ここでは、「ていねいさ」からみた文体を、次の(27)のように、6種類に分類する。

(27) 「ていねいさ」からみた文体の種類

- ┌ ていねい調……純粋ていねい調、強いていねい調、弱いていねい調
- └ 中立調……純粋中立調、強い中立調、弱い中立調

はじめに、ていねい調の3種類の文体の例をあげよう。

「純粋ていねい調」というのは、すべての文がていねい形になっている文章・談話で、次の(28)のようなものである。この文章はすべての文がていねい形で書かれた自叙伝である。下線を引いた文はその後の文の「そんな(とき)」に従属してもいいような文であるが、中立形の従属文にはならず、ていねい形の実事文になっている。

(28) 体中にキスをされて、私がかすくったような顔をしたり、わざと感じたような顔をすると、彼は真底うれしそうな彼独特の奇声をあげて突然飛び上ると、足踏みをして歌ったり踊ったりのバカ騒ぎが始まります。そんなときの彼には、放浪の民族を思わせる動物的な野性と狂気が、ほとばしるようでした。

(長嶺ヤス子『炎のように火のように』p. 86)

「強いていねい調」というのは、心情文や従属文の一部が中立形になっている文章・談話

(10) 「ていねいさ」からみた文章・談話の構造

で、次の(29)のようなものである。この文章は講演の速記録をもとにしたもので、ていねい形の文が基調になっているが、点線を引いた文のような従属文は中立形になっている。

(29) イサベルの生まれた宮殿は今でも残っていますが、行ってみますとおどろくほど粗末な建物です。フェリペ二世の作りました、マドリッド郊外のエル・エスコリアルルの宮殿などと比べますと、スペインがわずか一世紀ぐらいのあいだに、どんな大国にのし上ったかということが、実感的によくわかる。それほど貧しいところです。
(増田義郎『コロンブス』p.121)

「弱いていねい調」というのは、心情文や従属文がほぼすべて中立形になるだけでなく、事実文の一部も中立形になっている文章・談話で、次の(30)のようなものである。これはインタビューをもとに構成された文章であるが、点線を引いた文のように、事実文のなかにも中立形になっているものがある。

(30) 去年、自分を知らされるっていう意味で、彼女とのすごく大きな別れがあったんです。その人が、いろんな僕自身を見せてくれた。音楽とか自分自身に自信が持てないで煮詰まっていると、周りにいる人を幸せにできないなって痛感もしました。
(『JUNON』1997.3 p.167)

これら3種類のていねい調の文体を表にすると、次の(31)のようになる。

(31) ていねい調の3種類

	純粹ていねい調	強いていねい調	弱いていねい調
心情文	(使われない)	中立形	中立形
従属文			
事実文	ていねい形	ていねい形	ていねい形
主張文			
伝達文			

次に、中立調の3種類の文体の例をあげよう。

「純粹中立調」というのは、すべての文が中立形になっている文章・談話で、次の(32)のようなものである。これは数学の本の文章で、本文はすべて中立形の文になっている。点線を引いた命令を表す文も「求めよ」という中立形になっている。(一段動詞の命令形には「求めろ」と「求めよ」の2つの形があるが、「求めろ」が非ていねい形で、「求めよ」が中立形だと考えられる。)

(32) 直角をはさむ2辺の長さの和が12 cmの直角三角形がある。この直角三角形の面積の最大値を求めよ。
(志賀浩二『微分・積分30講』p.31)

「強い中立調」というのは、質問や命令を表す伝達文だけがていねい形になっている文章・談話で、次の(33)のようなものである。この文章は新聞記事で、基本的に中立形で書かれているが、下線を引いた、質問を表す伝達文だけがていねい形になっている。

(33) 思えば日本式ブルマーだって出現当初は好奇の目にさらされたもの。「はしたない」のカゲ口に敢然と挑み、女性スポーツの分野を拡大していった歴史がある。
レオタード・スタイルのヒントになった“美しきレオパード(ひょう)”フロレ

ンス・グリフィス・ジョイナーは「美しく勝つ」を目指している。そう、今や世界は「美しく勝つ」時代。スポーツスタイルで日本が世界をリードするチャンスとは思いませんか？ (『毎日新聞』1989.2.9 朝刊 p.21)

「弱い中立調」というのは、伝達文だけでなく、判断や説明を表す主張文の一部もていねい形になっている文章・談話で、次の(34)のようなものである。これは小説の文章で、ほとんどの文が中立形になっているが、下線を引いた文のように、物語の筋にたいして説明を加える文で、ていねい形が使われているところがある。

(34) ぼくの最初の引越しの記憶。帝国の住人としての自覚を初めて持ったのは、川を渡って対岸の町に移り住んだ時だった。ぼくは眠っているあいだに対岸の町に連れて行かれたのです。ふと目覚めると、そこは見知らぬ土地だったなんて経験は幼ない子供には日情茶飯事だけれども、あの時ばかりは「変だ」「おかしい」「^{だま}騙された」と思った。(島田雅彦『忘れられた帝国』p.10)

これら3種類の中立調の文体を表にすると、次の(35)のようになる。

(35) 中立調の3種類の文体

	純粹中立調	強い中立調	弱い中立調
心情文	中立形 (使われない)	中立形	中立形
従属文			
事実文			
主張文			
伝達文	ていねい形	ていねい形	

8. ほかの文法現象との関係

ここまで、文の「ていねいさ」と文章・談話の構造との関係のみてきたが、文章・談話の構造と関係がある文法現象は「ていねいさ」だけではない。テンスやモダリティ、主題なども文章・談話の構造と密接な関係がある。文章・談話の中で、従属文が主張文や伝達文と違う性質をもつ文法現象をあげると、次の(36)のようになる。

(36) 文章・談話の構造と関係がある文法現象

	従属文	主張文・伝達文
ていねいさ	ていねいさ非考慮 ←→ ていねいさ考慮	
テンス	相対的なテンス ←→ 絶対的なテンス	
モダリティ	虚性モダリティ ←→ 真性モダリティ	
主題	主題をもてない ←→ 主題をもてる	

ていねいさについては、この論文でみてきたように、従属文では、ていねいさ非考慮の中立形が使われやすく、主張文や伝達文では、ていねいさ考慮のていねい形か非ていねい形が使われやすい。

テンスについては、従属文では、従属先の文の事態がおきる時を基準にした相対的なテンスになりやすく、主張文や伝達文では、発話時を基準にした絶対的なテンスになりやす

(12) 「ていねいさ」からみた文章・談話の構造

い。たとえば、次の(37)の点線の文で、過去のことを述べているのに、「なかった」ではなく、「ない」という形が使われているのは、この文がその後の文の「そんな(ときに)」に続いていく従属文で、「ない」が相対的なテンスになっているからである。

(37) 「当時の日本経済は、外貨の備蓄が四十億ドルぐらいいかない。そんなときにテレビ映画の輸入でドルを持っていかれては」と憂慮したのだった。

(『朝日新聞』1986.8.23 夕刊 p.15「芸能史を歩く」)

モダリティについては、野田(1989)の「真性モダリティ」と「虚性モダリティ」の分類でいうと、従属文では、話し手の発話時の心的態度を表すわけではない虚性モダリティになりやすく、主張文や伝達文では、話し手の発話時の心的態度を表す真性モダリティになりやすい。たとえば、次の(38)の点線の文の「かもしれない」は、話し手の発話時の判断ではなく、奈津の過去の時点での判断を表している。そうなるのは、この文がその後の文の「そう(考えて)」に従属している従属文で、虚性モダリティになっているからである。

(38) 妹でもいい、電話があったことを知れば、ひよとしたら、あとで信次のほうから電話をかけてくるかもしれない。奈津はそう考えて、

「ほな、妹さんを読んでいただけますやろか」

と言った。

(宮本輝『夢見通りの人々』p.220)

主題については、従属文では主題をもてないものが多いのにたいして、主張文や伝達文では主題をもてるものが多いという違いがある。たとえば、次の(39)の点線の文で、「テープサイズは」になってもいいはずなのに、「テープサイズが」になっているのは、この文がその後の文の「それ(でいて)」に従属した従属文だからである。

(39) テープサイズが、今までのカセットテープとほぼ同じ。それでいて音はクッキリのデジタルサウンド。DCCの音は僕を満足させてくれた。

(『POPEYE』1993.7.21 p.41)

このように、ていねいさだけでなく、テンスやモダリティ、主題なども文章・談話の構造と関係がある。ということは、ていねいさから文章・談話の構造を考えることは、文法現象から文章・談話の構造を分析するという大きな課題の一つだということになる。

9. まとめ

最後に、この論文で述べたことを簡単にまとめておこう。

「ていねいさ」を表す形態と機能については、次の1)のようにまとめられる。

1) 非デスマス形には2つの種類がある。「ていねい形」と対立し、ていねいでないことを表す「非ていねい形」と、ていねいさを考慮しない「中立形」である。

ていねい調の文章・談話の構造については、次の2)から4)のようにまとめられる。

2) ていねい形の文が基調の「ていねい調」の文章・談話は、基本的に、判断や説明を表す主張文や、質問や命令を表す伝達文をベースに構成されている。

3) ていねい調の文章・談話の中に、中立形の文が現れることがある。中立形になるのは、聞き手を意識しない心情文と、前後の文に従属した従属文である。

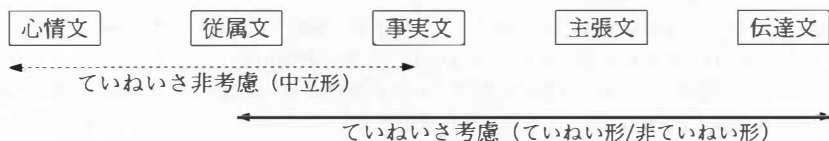
- 4) ていねい調の文章・談話には3つの文体がある。すべての文がていねい形になる「純粹ていねい調」と、心情文と従属文の一部だけが中立形になる「強いていねい調」と、事実文の一部も中立形になる「弱いていねい調」である。

中立調の文章・談話の構造については、次の5)から7)のようにまとめられる。

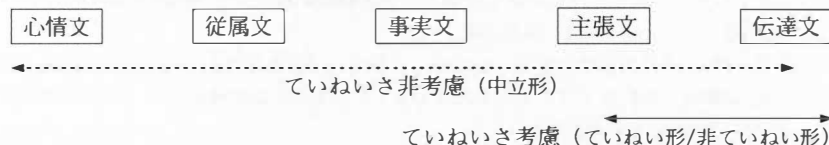
- 5) 中立形の文が基調の「中立調」の文章・談話は、基本的に、単に事実だけを述べる事実文をベースに構成されている。
- 6) 中立調の文章・談話の中に、ていねい形の文が現れることがある。ていねい形になるのは、判断や説明を表す主張文と、質問や命令を表す伝達文である。
- 7) 中立調の文章・談話には3つの文体がある。すべての文が中立形になる「純粹中立調」と、伝達文だけがていねい形になる「強い中立調」と、主張文の一部もていねい形になる「弱い中立調」である。

この論文では、ていねい形と中立形の混用をとりあげたが、これは本質的には、「ていねいさ考慮」と「ていねいさ非考慮」の混用ということである。次の(40)と(41)は、それぞれ、ていねい調と中立調の文章・談話の中で、ていねいさ考慮の形とていねいさ非考慮の形がどのように現れるかをまとめたものである。

(40) ていねい調の文章・談話の中でのていねいさ考慮と非考慮



(41) 中立調の文章・談話の中でのていねいさ考慮と非考慮



この論文では、ていねいさだけに注目して文章・談話の構造を考えてきた。これからは、ていねいさだけでなく、テンスやモダリティ、主題、ボイスなどの文法現象からも文章・談話の構造を分析することによって、さらに一般的な形で文法現象と文章・談話の構造の関係をあきらかにしていくことが必要だと考える。

なお、この論文は、1997年5月25日に大阪市立大学で開かれた国語学会平成9年度春季大会において同じ題目で行った研究発表をもとにまとめなおしたものである。

【例文採集資料】

『朝日新聞』 [～1990] 朝刊13版(茨城県南版)、夕刊3版 朝日新聞東京本社

[1991～] 朝刊14版(阪神版) 朝日新聞大阪本社

『JUNON』(ジュノン) 主婦と生活社

『POPEYE』(ポパイ) マガジンハウス

(14) 「ていねいさ」からみた文章・談話の構造

- 『毎日新聞』朝刊13版(茨城県南版)毎日新聞東京本社
井上ひさし・つかこうへい『国ゆたかにして義を忘れ』角川書店 1985
北川悦吏子『ロングバケーション』角川書店 1996
黒田恭一『はじめてのクラシック』(講談社現代新書874)講談社 1987
小室哲哉(編)『With t 小室哲哉音楽対論 Vol.4』(幻冬舎文庫)幻冬舎 1997
志賀浩二『微分・積分30講』(数学30講シリーズ1)朝倉書店 1988
島田雅彦『忘れられた帝国』毎日新聞社 1995
長嶺ヤス子『炎のように火のように』(文春文庫)文藝春秋 1985
増田義郎『コロンプス』(岩波新書(黄版)93)岩波書店 1979
宮本輝『夢見通りの人々』(新潮文庫)新潮社 1989
村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』新潮社 1985
山口昌男『文化人類学への招待』(岩波新書(黄版)204)岩波書店 1982
山田詠美『風葬の教室』(河出文庫)河出書房新社 1991
吉永良正『「複雑系」とは何か』(講談社現代新書1328)講談社 1996
吉本ばなな『キッチン』福武書店 1988

【参考文献】

- 足立さゆり(1995)「日本語の会話におけるスピーチ・レベル・シフト」『拓殖大学日本語紀要』5 pp. 73-87 拓殖大学国際部
生田少子(1983)「Discourse Strategy としての敬語の機能」F. C. バン(他)(編)『機能によることばの分析』(言語社会学シリーズ5) pp. 7-22 文化評論出版
生田少子・井出祥子(1983)「社会言語学における談話研究」『言語』12-12 pp. 77-84 大修館書店
宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用——スピーチレベルシフト生起の条件と機能——」『学苑』662 pp. (27)-(42) 昭和女子大学近代文化研究所
岡本能里子(1997)「教室談話における文体シフトの指標的機能——丁寧体と普通体の使い分け——」『日本語学』16-3 pp. 39-51 明治書院
仁田義雄(1991)「言表態度の要素としての〈丁寧さ〉」『日本語学』10-2 pp. 65-75 明治書院
野田尚史(1989)「真性モダリティをもたない文」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』 pp. 131-157 くろしお出版
芳賀綏(1954)「“陳述”とは何もの?」『國語國文』23-4 pp. 47-61 中央圖書出版社
芳賀綏(1962)『国語表現教室』東京堂
三尾砂(1942)『話言葉の文法(言葉遺篇)』帝國教育會出版部(改訂版『話しことばの文法』法政大学出版局 1958、初版の復刊 くろしお出版 1995)
三上章(1963)『日本語の構文』くろしお出版
三牧陽子(1993)「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 第I部門 人文科学』42-1 pp. 39-51 大阪教育大学
メイナード・K・泉子(1991)「文体の意味——ダ体とデスマス体の混用について——」『言語』20-2 pp. 75-80 大修館書店
Maynard, Senko K. (1991) “Pragmatics of discourse modality: A case of *da* and *desu/masu* forms in Japanese.” *Journal of Pragmatics* 15-6. pp. 551-582. North-Holland.

——大阪府立大学助教授——
(平成9年12月24日 受理)